

Title	ポスト・モダンな感じ：感情文化と社会変容
Sub Title	Postmoderned Gefühl : Emotionskultur und Soziale Transformation
Author	岡原, 正幸(Okahara, Masayuki)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1990
Jtitle	哲學 No.91 (1990. 12) ,p.463- 484
JaLC DOI	
Abstract	Es ist die Ziel dieses Aufsatzes, die Emotionsphanomen in der modernen, oder manche sagten, postmodernen Gesellschaft deutlich zu machen. Dazu musse man sich zuerst vor allem die zwei theoretischen Ausgangspunkte klarmachen. Die gegenwartige Lage unsere Gesellschaft lasset sich zum einen als gewandelt in die selbst-reflexive begreifen und beschreiben. Zum zweiten werden einige Begriffe, wie sinnstiftete Emotionskonstruktion, Emotionsregeln oder Emotionsmanagement, die aus der symbolisch-interaktion-istischen Emotionssoziologie stammen, in die Analyse als methodologisches Gerat eingefuhrt. Empirische Ereignisse stellen einen Wandel in der in den verschiedenen Bereichen zum Ausdruck kommenden, kulturellen Kodierung der Emotionskultur fest. Sie Verandert sich der sozialen Transformation uberhaupt entsprechend, die sich auf dem Niveau der positiven Basis, worauf die jeweilige Gesellschaftsformation grundsatzlich steht, allmahlich ereignet. Neu erschienen sind die Kommerzialisierung und die Selbst-thematisierung oder Simulierung von Emotionen.
Notes	文学部創設百周年記念論文集I Treatise
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000091-0463">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000091-0463</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# ポスト・モダンな感じ

—感情文化と社会変容—

—岡 原 正 幸\*

## Postmodernes Gefühl

—Emotionskultur und Soziale Transformation—

*Masayuki Okahara*

Es ist die Ziel dieses Aufsatzes, die Emotionsphänomen in der modernen, oder manche sagten, postmodernen Gesellschaft deutlich zu machen. Dazu muß man sich zuerst vor allem die zwei theoretischen Ausgangspunkte klarmachen. Die gegenwärtige Lage unserer Gesellschaft läßt sich zum einen als gewandelt in die selbst-reflexive begreifen und beschreiben. Zum zweiten werden einige Begriffe, wie sinnstiftete Emotionskonstruktion, Emotionsregeln oder Emotionsmanagement, die aus der symbolisch-interaktion-istischen Emotionssoziologie stammen, in die Analyse als methodologisches Gerät eingeführt. Empirische Ereignisse stellen einen Wandel in der in den verschiedenen Bereichen zum Ausdruck kommenden, kulturellen Kodierung der Emotionskultur fest. Sie verändert sich der sozialen Transformation überhaupt entsprechend, die sich auf dem Niveau der positiven Basis, worauf die jeweilige Gesellschaftsformation grundsätzlich steht, allmählich ereignet. Neu erschienen sind die Kommerzialisierung und die Selbst-thematisierung oder Simulierung von Emotionen.

\* 慶應義塾大学文学部助手 (社会学)

感情の現象形態は、それぞれの時代に  
応じて、歴史的な、特殊な限定や拘  
束を受けている。感情は決して、普遍  
的・人間的なものでも、超時代的なも  
のでもない。……B. Brecht

---

0. はじめに	1.3.2. 社会史との接点
1. 感情社会学——本稿の主題系と概念整理	1.3.3. 人類学との接点
1.1. 感情社会学概観	2. 感情文化の変容
1.1.1. ニューパラダイム	2.1. 変容モデル
1.1.2. 分類	2.2. 母性愛の発明——モデル的解釈
1.1.3. 本稿の視角	2.3. 感情文化の変容
1.2. 概念装置	3. 感情と社会変容
1.2.1. 感情	3.1. 感情文化の歴史的変移
1.2.2. 感情規則	3.2. 感情の市場化
1.2.3. 感情操作	3.3. 感情シミュレーション
1.3. 感情文化	4. おわりに
1.3.1. Emotional Culture	5. 参考文献

---

## 0. はじめに

本稿の課題を設定する。現代社会に生きる人々にかかわる感情現象を把握すること（そのための前梯的作業）、これである\*。この課題達成のために必須の作業工程がある。現代社会のメルクマールを何に求めるか、感情現象への分析視覚をどこに求めるか、この二つである。前者については一学的共通理解の程度を考慮して後者に本稿の比重を置くため—十分な議論はできないが、暫定的にこう考える。現代社会とはモダンな社会編制原理の徹底・先鋭化と、その実定的基盤たる主体の変容と相即するそれらの原理それ自体の崩壊・新規構築が、様々な部分で生起している社会である [内田, 1987, 参照]. 「感情」という部分においてそれらふたつの傾向がいかに現われるか、それが問題である。後者については、感情社会学の知見を方法論的ツールとして用い、特に「感情文化」概念の導入、その変容モ

デルの仮設、歴史的変移の考察を主眼点とする。モダンな感じからポスト・モダンな感じへの転換が描出の焦点である。

\* 本稿で展開される議論については、安積・岡原・尾中・立岩 [1990] の調査と情緒産業に関する調査 (1988年に着手, 継続中) より得られた資料が背景にあるとはいえ, 言及される個々の概念, コンセプト, 命題に対する実証的裏付けは紹介できない (感情社会学的思考の実証性に留意した考察は, Gerhards [1988], Thoits [1989] を参照). したがって, 本稿が提起する諸命題 (特に 3.2., 3.3.) を実証する作業は全て先送りとなる. なお, 本稿の議論 (特に 1.2., 2.) に関して, スタッフ研究会 (慶應義塾大学内) と現象研 (お茶の水女子大学内) の方々, 田辺祥子氏 (明治学院大学) と木田邦治氏 (慶應義塾大学) から貴重なコメントを頂いた. 感謝を申し述べたい.

## 1. 感情社会学——主題系と概念の整理

感情社会学として分類される視角の基本的特徴, 本稿の立場, 使用される概念の定義, 対象としての感情文化の戦略性が明らかにされる.

### 1.1. 感情社会学概観

1.1.1. ニューパラダイム——感情を分析対象とする社会学の総称として「感情社会学」があるのではない. このディンプリンで従来, 感情が扱われる場合には大別して三つの形式がある. 1) 一般社会理論の構成素として感情という項を組み込む形式\*, 2) 個別感情を主題化し, その存立構造や社会的なるものへの機能を問う形式\*\*, 3) 感情一般を主題化し, その形成過程に関与する社会性を分析する形式, 以上である. 1970年代以降に出現し, “Sociology of Emotions” を明示的暗示的に掲げる研究は三つめの形式に属す\*\*\*. 前二者に対してそれらは更なる内容的特徴として, 1) 心理学的生理学的感情論との対峙\*\*\*\*, 2) 感情現象の分析に向けられた特有な概念装置の創出 [1.2. 参照], がある. 但し, 出現当時と比較して学的制度化が進行した現在では\*\*\*\*\*, 感情社会学の範囲で前二者の形式に該当する研究も語られることがある.

\* Le Bon, Tarde, Weber, Cooley 等の古典的社会理論, G. Homans の交換理論, L. Coser の闘争理論, T. Parsons や N. Luhmann のシステム論における感情の理論的準位を想起してほしい。また言うまでもないが、個々の研究者が三つの形式の一つに一対一対応するわけではない。

\*\* 機能的分析としては, Durkheim, Simmel 或は K. Davis (嫉妬), R. Coser, A. Zijderveld (笑い・ユーモア), E. Goffman (困惑), A. Gehring, F. Tenbruck (同情・友情), W. Goode (愛情)。存在論的分析としては, M. Scheler, 作田啓一 (恥), 木村洋二 (笑い)。

\*\*\* ニューパラダイムとしての感情社会学が醸成する素地として, ①新たな家族形態や生活様式への社会的模索, ②フェミニズムに代表される, 「感情的であること」を刻印されたマイノリティからの異議申し立て, ③合理性偏向に基づくパラダイムのゆらぎ, が挙げられる。

\*\*\*\* W. James, S. Freud, W. Cannon, S. Schachter, S. Valins, D. Funkenstein 等の理説が言及される。大別して三つの立場がある。①Cannon (中枢起源説), Schachter (認知的レイベリング) に依拠して生理学的生物学的基体と感情を分離する [Shott, 1979. Hochschild, 1979]。②個々の感情と生理学的基体との対応を想定し, 社会的感情喚起の恒常性を主張する [Kemper, 1981, 1984]。両者の対立点については Kemper [1980], Shott [1980] を参照。③精神力動的な感情概念, エネルギーとしての情動を評価する [Scheff, 1979. Collins, 1984]。感情社会学における生理学的呪縛の問題点については, 岡原[1987b] を参照。

\*\*\*\*\* 1986年にはアメリカ社会学会で感情社会学部会の設立, 専門雑誌の特集や社会学シリーズの一卷として編集 [Symbolic Interaction, 1985. Franks/McCarthy, 1989] など, 感情社会学は「概念や視角の展開という幼児期を越え, 理論的洗練や調査という子供期に入った」[Thoits, 1989: 338]。同時に研究の多量化多様化が感情社会学の間口を拡大した。

1.1.2. 分類——代表的視角を S. L. Gordon [1985], J. Gerhards [1986], P. A. Thoits [1989] の整理に基づき紹介する。三者の見解を整理すれば図のようである。

縦行は各人の分類を示し, 横行は (分類名称は異なるが) その対応関係を示す。記述的な分類である前二者に対し, Thoits は分類基準として分析視角のミクロ (社会心理学的)/マクロ (構造—文化的) 並びに理論命題における感情の変数的位置付けを採用する。その結果, 分類は複雑になっ

Gordon		Gerhards	Thoits		
I	行動主義的交換理論	感情の社会構造理論	ミ ク ロ	従属変数	ポジテイヴィスト
II	シンボリック・インタラクショニズム	象徴的構成体としての感情		S. I. (略記)	
				社会構成主義 強/弱 [IV]	
				独立 “SHOTT” “SCHEFF” [V]	
III	コンフリクト理論	社会的現実の構成形態としての感情	媒介	“COLLINS” ミクロ→マクロ (“SCHEFF” マクロ→ミクロ)	
			マ ク ロ	従属	社会史 [VI]

図

た。三者の共通項を除外すれば、I～VI の類型がある。簡潔に解説する。

I. 代表者は Th. D. Kemper, 彼の理論は生理学的機構を賦活する社会的刺激を権力や地位という変数によって体系化する。II. シンボリック・インタラクショニズム (S. I. 略記) [後述, 1.1.3.]. III. R. Collins [1984] の議論は相互作用儀礼における感情エネルギーの産出による社会統合に関する。このデュルケミズムは感情の社会体への効果を主題化した点で他の論者とは異質である。IV. J. Averill, R. Harre 等の感情の社会的構成を主張する立場で、生物学的な基本感情の存在を否定する強いバージョンと、その存在を認めつつもその因果関係を否定する弱いバージョンがある\*, V. 独立変数として感情を措定する。例えば Th. Scheff [1988] では羞恥感情が同調行動を導くとされる。VI. 感情の歴史的変容を記述, 或いは社会構造的要因から説明する。社会史, 特に心性史が代表的である。

\* Thoits [1989: 319-20] の議論では、社会構成主義, 特に弱バージョンと S. I. との差異が不明確である。基本情動・生理的興奮の存在は認め、その因果

的作用を否定する点では両者は一致する。

1.1.3. 本稿の視角 (S. I.)——社会的なもの、行為の目的・手段、状況や事物などは行為者の意味や構成作業から独立的に自存しない。よって問題は意味や解釈が成立する場としての相互作用の有り様にある、と把握する S. I. [Blumer, 1969. 参照] がある。この視角が感情分析に導入される [Hochschild, 1979, 1983., Shott, 1979]. 感情は物理的社会的刺激に対する生理的機構による自動反応でなく、状況定義、感情にかかわる規範、感情の語彙、感情に関する社会的了解等に依存し、それらが結像する意味付与や解釈過程\*によって産出される、と理解する [岡原, 1987, 1987a]. 本稿は以後この視角を採用する。理由は、1) 概念装置の創出と整備が他の視角に優越する、2) 生理学的次元の議論を分離可能である、3) 感情分化や感情の文化的歴史的差異の説明が容易である、4) 従来的な感情理解の理論的相対化—現代的感情現象の歴史的反省に必要—に資する、以上である。

\* 意味付与・解釈に関する、主体と構造の対立的理解に起因する不毛な議論に言及する必要はない。両項目とも構成的作用を有する。Shott [1979: 1330] は言う、「文化的制限のなかで、人は生理的興奮を指示する内的指標とそれを感情とする解釈の二つを要する過程を通じて感情を構成する」(強調は引用者)。

## 1.2. 概念装置

1.2.1. 感情——S. I. では二つの構成素により感情を定義する\*。感情とは主体によって感情的に誘発されたと解釈された生理的興奮状態・身体状態である [Schachter/Singer, 1962., Shott, 1979:1318., Hochschild, 1979:551-555]. 生理的興奮と感情レイベリングを構成素とする定義である\*\*。補足的に二つの概念を追加する。感情経験と感情表出である。感情経験とは主体が感情を現実として主観的に経験している事態である。感情表出とは主体が自身における感情の有無(種類・強度)を結果として他者に伝達するコミュニケーションである。主体の意識に定位した場合、経験

と表出はともに反省的あるいは非反省的である。感情分化・感情の種別化に照準した場合、経験と表出はともに感情分化的（個別感情を指示）あるいは感情未分化的である。

\* 感情それ自体の分類的定義は行わない。emotions, feelings, affects, moods, sentiments 等の種差については Thoits [1989], 社会学概念として “sentiment” を推奨する Gordon [1981] を参照。但し、日常的な語の使用として感情一般を指す「感情・情緒」と個別感情を個々に指す「喜」「怒」「恥」「愛情」があることに注意する。

\*\* 原理的疑義は多々ある。感情の定義における「感情的」という形容の使用はトートロジーであり論理破綻だという批判が一例である。岡原 [1987a] は、生理的興奮を不可欠な感情構成素とすることの難点を指摘し、感情レイベリングを主とする操作的定義——感情唯名論——を提案する。社会学的分析にとり曖昧で操作化困難な「生理的興奮」を理論的に保存する積極的理由は、精神力動的にエネルギーとしての生理状態を仮定し、そこから社会の動態性を説明する試み [Collins, 1984., Scheff, 1979] を除外すれば、常識に近いという理由だけである。そもそも S.I. による定義が生理を要件化したこと自体、感情を個体内部の実体として了解する社会的枠組を維持する実践であった。にもかかわらず本稿で S.I. を採用するのは、それが当該主題に適した理論深度を装備し、かつ自身の依拠する前提的枠組を内破する潜在性を持つと考えるからである。

1.2.2. 感情規則——事物，状況，身体状態への意味付与や解釈は常にランダムなのではなく，規則性を示す。特定解釈がある状況の個別的文脈を離脱し新たな状況や文脈で再生産されるからである。そこには解釈の範型にある規範的規制が作用する [Gerhards, 1988:171-174]. 何をどの様に如何なる状況で感じ表出すべきか，を指示する枠組となる “feeling-rules” [Hochschild, 1979:563-568] が想定される。それは性・年齢・地位・階層あるいは巨視的な社会構造的相違によって異なり変化する [567-573]. それはまた主体の感情を決定するわけではないが，主体がそれを使用することで感情期待を成立させ，感情逸脱を規定する。経験と表出に準拠すれば，表出行動に関わる（感情）表出規則と経験に関わる（感情）経



験規則に感情規則は二分される\*。主体の意識において感情規則は反省的あるいは非反省的である\*\*。

\* 岡原 [1987] では、表出規則、経験規則をそれぞれ感情規範、感情規則と命名しているが、用語上の混乱を招きやすいためにここではそれを撤回し以上の如くに改める。

\*\* 日常的世界の自然的様態においては、対自化された感情規則の使用が判断的・推論的な覚醒的知的活動として遂行される場合（異文化接触、状況定義の葛藤、規律・訓練場面など）より、その使用がルーティン化し脱意識化され直接的無媒介的な反応態勢へと沈殿している場合が一般的である。反省的な感情規則の覚知が稀少なる所以はそれである（感情や感情操作の反省性についても同様である）。

1.2.3. 感情操作——Hochschild [1979: 561-563] は述べる。“emotion work” “deep-acting” と同義である感情操作とは「感情の程度や質を変更する試み」である。E. Goffman の印象操作、S. Freud の無意識的抑圧というコンセプトの複合拡大ヴァージョンである\*。さらに広義に解釈する。感情の成立に関わる多様な解釈作業——主に感情規則の使用を発効する意味付与作業全般——を感情操作と呼ぶ。すると S. I. では感情の経験・表出の構成にとり感情操作を不可欠と考えることになる。経験・表出の位相を分離すれば、(感情) 経験操作と (感情) 表出操作に分かれる。操作主体の個体への実体化を留保すれば、主体の様式に基づいて、感情操作は個人的あるいは集合的である [Gordon, 1981: 586., 安積・岡原・尾中・立岩, 1990, ch. 5]。対自的な現成様態としては、感情操作は反省的あるいは非反省的である。また主体が自身に内属する感情を操作対象とする場合と、他者に内属する感情を操作対象とする場合がある [Hochschild, 1979: 562]。後者を社会的感情操作と呼ぶ\*\*。Gerhards [1988a] は感情操作概念の限定化を試み、市場労働に組み込まれた（職業役割の中心期待となった）感情操作を感情労働 (Emotionsarbeit) と呼ぶ。

\* 両コンセプトの構成素：意識的・表出感情・操作 (Goffman) と無意識的・内的感情・抑圧 (Freud) を組み合わせる。彼女自身の力点は意識的・内的感情・操作にあるが、論理的可能性として他の場合を否定しない。

\*\* Hochschild [1979, 1983] は emotion work の焦点を「個人的・反省的・感情経験操作」に置く。

### 1.3. 感情文化

感情現象（感情に関わる言説的非言説的諸実践の総体）に対して本稿が分析平面として抽出する「感情文化」を明らかにされる。

1.3.1. Emotional Culture——Gordon [1989: 115] は説明する。感情文化\*は「感情に関する広範囲で複雑な意味の解釈枠組」であり、「感情に関する知識や態度の伝達・保存・発展に使用されるシンボルに体现された意味体系」である。それは「感情の原因や性質に関する説明」を与え、「感情の表出・隠蔽・修正の技法を明らかにする」。科学理論、宗教的教説、あるいは人々の処世知、神話なども含まれる。S.I. の理論平面では感情経験や感情表出を成立させる解釈過程に関与しえるすべての文化項目が感情文化として語られる。感情規則、感情語、表出身体技法、感情に関する言説などが例である。感情文化の成立次元は経験や表出のそれと異なる。具体的に現実化された感情は感情文化に正確に対応するとは限らない。だがこれは研究上の難点ではない。理由は、感情社会学が、1) 感情の個性性を分離しその集合性に照準する、2) 感情の文化的歴史的差異に照準する、3) 感情への社会構造的効果に照準する、4) 実証的資料を必要とする、その限り、対象としての有意義性が感情それ自体より感情文化にあるからである。

\* W. Lepenies [1985] は “Gefühlkultur (culture of the feelings)” を合理的理性を嫌い感情を指向・嗜好する文化の意で用いる。それは感情文化概念と異なる。Lepenies の前提にあるエスノ心理学こそが近代社会の代表的な感情文化である。

1.3.2. 歴史学との接点——1941年に L. Febvre [1977]\* は、感情は外的刺激への自動反応でも個人的でもなく、人間関係や集合行動の様式であると考え、「感情生活とその表現形態」を歴史学的対象とした。同時に感情の普遍性を前提とし現代的感情理解を過去へと逆投射する心理学的アナクロニズムを批判した [Sonntag, 1988]。そこに歴史的相対性の認識に基づく感情への主題的方法的反省を見い出せる。だが感情と自覚的に分離された感情文化の主題化は P. Stearns/C. Stearns [1985] による。彼らは感情やその表出に対して社会や集団が維持する特有の態度（煽動、禁止、無関心）・基準を“emotionology”と呼び、感情経験と区別される集合的な感情基準や感情価値の主題化を研究戦略上と方法反省上で推奨する。この、感情についての人々の理論＝エモーショノロジーと感情文化は方法論的ツールとして同一である。

\* アナール派の社会史には多様な立場がある [岡田, 1990]。心性史は感情文化に焦点を当てた感情史と理解される。他に文学史においても感情文化への歴史的接近を見い出せる [Mog, 1976]。

1.3.3. 人類学との接点——1934年に R. Benedict [1973] は文化の型を二分する。アポロ型とディオニュソス型である。一方は感情抑圧的で思考優先、他方は恐怖や恥辱を行動原理とする。そして後年罪の文化に対する恥の文化としての日本論を提出する。ここに展開される視点は文化相対的な感情文化をおぼろげながらまなざす。C. Lutz [1988] はアメリカとミクロネシアを比較する際、日常的な言説実践に使用される“emotion concepts”を中心に据える。イデオロギー的实践として、出来事の意味確定や資源統制に関する交渉に使用される感情観、感情一般への社会的了解がそれである。感情に関する西洋的言説の脱構築を一つの目標として設定する彼女は、アメリカの感情観として、思考や疎外に対立する、非合理的、主観的、女性的、身体的なものとしての感情や、危険、統御不能な行為、自然的事実、価値としての感情を挙げる\*。感情観は感情文化の代表的な一

部である。

\* Okahara [1990] は日常的な感情理解・感情観を西洋近代社会と伝統的日本において比較する。

## 2. 感情文化の変容

1.2. で提出された概念装置を主に用い、対象としての感情文化の変容過程が試案的に図式化される。またそれが近代的な母性愛の感情文化的準位における成立に適用される。

### 2.1. 変容モデル

変容機序が作動する以前の情勢を仮想的にみる。社会空間全域的に一元的な感情文化の一意的な流通を想定するのは多分誤りである。局域的な種々の感情文化の並存、競合、対抗が常態であり、またある特定文化内部の個人すら共同主観的に同型的な感情への調律をその都度実践的に遂行している [岡原・木田, 1988]。つまりある社会空間での感情の発現（ある事態を感情現象あるいは非感情現象へと帰属する原初的作業を含め）は原理的に政治的であり得る。この点には留意を要する。

変容過程を三段階にモデル化する。I—既存感情文化（その部分）の問題化。宗教、倫理、科学、啓蒙、政策、運動などの形態で言説的非言説的諸実践が「感情」を標的とし\*、新たな感情規則の主題的導入が開始される。II—感情操作（社会的集合的）の実行。新規感情文化の未浸透部分（ある階層、ある集団、ある家族、ある個人）への法的道義的・経済的・医療的な多様な介入と、それを事実上発効する制度的制裁が確立・展開される。感情関連的な意味付与作業のマイクロポリティークが顕在化する。当該の個人主観にとって感情規則は反省的である。III—感情操作（個人的）の実行。個人が既存感情文化の個人的問題化を経過し、自身への感情操作を実行する。感情操作並びに感情規則は非反省的で自然的性格を帯びる。意味付与作業のマイクロポリティークは潜在的である。

\* 特定感情文化（それを支持する諸実践）の社会的優越，文化ヘゲモニーの獲得を起因する条件的事態の主題化は取敢えず留保する。また，モデルとはいえ主眼は形式的記述の可能性に置かれているため，段階的移行を説明する変容機序の提示には至っていない。課題である。

## 2.2. 母性愛の発明——モデル的解釈

西欧社会の「母性愛」の歴史性に関する言説がモデルにより整理される\*。  
〈母性愛の社会的問題化以前——18世紀以前\*\*——〉

一般的現象としての，乳母への託児慣行 [Badinter, 1981., Shorter, 1987., Perrot, 1988] があり母子の密接な情緒的関係は想定しにくい。また育児について「女性だけがはたすべきだとされる母親としての使命」はなく，「『子供にかなった』態度も，小さきものを『母親の立場で扱う』ことも，衛生観のしつけもなかった」[Duden, 1986: 19-20] と言われ「こどもを無視したり，こどもに無関心であるのは，あたり前のことであった」[Shorter, 1987: 189]。だから子殺しに対する母親の罪責観も欠如する [Schulte, 1984]。つまり「母性愛」と呼べる心的態度は社会的に主題化されておらず，個人にとってその存在は無関心であった。

### I 〈母性愛の社会的問題化〉

託児慣行の禁止が謳われ [Perrot, 1988]，子供の養育法への市民的改革運動 [Duden, 1986] が展開する。育児に関する教育学的医学的言説の氾濫 [Foucault, 1984]，母乳保育の必要性を主張する言説 [Shorter, 1987] が登場する。Badinter [1981] によれば，『エミール』(1762) 以後，母親に母性愛を訴える著作が氾濫，そこには子供の成長への母性愛の不可欠性や，母親のそれによる幸福・賞賛の獲得という言説が展開される。以上の母性愛の主題化は「社会的存在としその子供への関心」[Perrot, 1989: 17] から，母子の接触が緊密化し母親の役割が増大することと関連する。この役割を「女性の『自然的規定』として広めること」[Duden, 1986: 20] が必要とされ，「子供の弱さという観念」に基く「いたわりや可愛がり」と「救済の対

象」としての子供への「しつけや教育」、この二つの行為 [Ariès, 1980: 128, 239] を無葛藤に統合しそれを内閉する項として母性愛が煽動された。

## II 〈社会的感情操作化〉

博愛主義者や医師や教師の言説による社会的感情操作が効果的でない部分へは、乳母への公的斡旋の廃止 [Shorter, 1987] や児童保護法の制定による親権の剝奪並びに子供の保護と施設収容 [Perrot, 1988] など、主に国家による母性愛を含意する女性役割の制度化と規範化が進行する。母性愛の主題化が社会全域的に実行され、母子関係において生起する行為・状況と母親の内的状態（母性愛）の対応・相互代名詞化が全域的に社会規範化する。

## III 〈個人的感情操作化〉

社会的感情操作の客体が自己統御的に母性愛を問題化する主体となる。母性愛に関する感情規則は自覚的反省的であるより非反省的自然的態勢へと日常化する。近似的な事態としては個人が書き残した日記の内容\*\*\*に「母性愛」として自己の状態を記述する或いは愛ある親として子供を処遇できないことへの罪悪感や後悔、親としての自己能力の問題化や懐疑が登場する場合がそれである。対他的には自明的期待として母性愛が成立し、女性の身体や精神の医療化 [Honegger, 1983], ヒステリー化 [Foucault, 1986] と関連する。

\* 母性愛の歴史的展開を主題とした Badinter [1981] の枠組（第一部「愛の不在」第二部「新しい価値——母性愛」）に多く準拠する。

\*\* 母性愛を煽動する感情文化の浸透は地域差、階層差が顕著である。ここに提示する抽象化した各段階は現実的には局域的に多様な偏差を伴い現出する。以下の整理はモデル理解を促進するための単純化の所産である。18世紀という年代も大局的である。

\*\*\* Pollock [1988] から一例を取る。1769年生れの女性の描写「彼を胸にしっかりと抱きしめた瞬間、私はこれまでに経験したことがないような強い母性愛と喜びを感じて言葉が出なかった」[133]。付言すれば、Pollock は自身の意図に反

して「16世紀の親は子供期を認識しておらず子育ての責任をとることに不本意であったと結論するのは誤ちで、むしろ彼らがこういったことをとくに意識的に自覚していなかったからである」[187, 強調は引用者] と言うとき, Ariès のテーゼを肯定している。

### 2.3. 感情文化の変容

感情文化の編成は個々の個別感情或いは感情一般を焦点として実行される。その様態を大別すれば対象感情について, ①主題化的, ②非主題化的であり, さらに前者は, ③煽動的, ④禁止的である。母性愛への社会的対処は対象への非主題化的で無関心な様態から母性愛を称揚し規範化する煽動的な様態へと変容した。この場合非主題化的様態にて母性愛に関する感情文化的項目が全く存在しない事態が想定できれば, 個人主観は即自的にも対自的にも母性愛を経験しないといえる。Stearns/Stearns [1985] によれば怒りは合衆国において産業化と並行的に主に家族経営や工場経営の場で抑制対象となり始める。この場合が非主題化的様態から禁止的様態への変容である。感情文化の変容とは記述的には, ① $\longleftrightarrow$ ②, 或いは, ③ $\longleftrightarrow$ ④\* という移行の時系列的な生起である。

\* 禁止的様態から煽動的様態への変容は例えば性的感情について60年代の性革命を境界にして生じた。禁止・抑圧が性の言説化を煽動(広義)するという Foucault [1986] の議論はセクシュアリテの近代的感情文化が主題化的様態であることを語る。

## 3. 感情と社会変容

2. で提示された一般モデルを基盤に歴史的様相に沿って現代的感情文化が思考される。

### 3.1. 感情文化の歴史的変移

現代的感情文化への歴史的課題系を設定する。2.3. で記したパターンの内, ② $\longrightarrow$ ③ と ② $\longrightarrow$ ④ という変容に近接する M. Weber と N. Elias

の研究が示唆的である。

Weber はその膨大な仕事で散在的に感情に言及する。規律化論 [1962] では集団の合理的経営 *Betrieb* が内包する成員の規律化において感情的手段（感情や指導者への感情移入の煽動）の利用を論じる。「一律的な調教を受けた大衆の具体的・精神的な衝動力を合理的に計算された最善度に確保」[504] し、「一切が——しかも正に『不可量的なるもの』や非合理的・情緒的な諸要素をも含めて——…合理的に『計算される』ということ」[505] を目的とする規律は感情全てを排除するのではなく、計算可能な感情についてはそれを煽動し利用する。つまり規律化とは部分的には或る感情の煽動でもあり得る。あるいは恋愛 *Erotik* に関して [1972: 134-152], それを「性の素朴な自然主義」から意識的に「性の領域が価値の高い恋愛的情感へと組織的に整備され、性的関係における一切の純動物的なものが新たな解釈をあたえられつつ浄化され」ることで構築され、それは「文化の合理化と知性化の過程の全般的関連のなかに組み込まれていたのである」と述べる時、彼は感情の文化的煽動を合理化過程の文脈で問題にしている。

Elias [1977/78] は文明化を日常行動の文化的コード化として描写する。その部分として自身による感情統御 *Affektkontrolle*, つまり感情表現の程度、感情と思考の割合、統御の安定性などが問題とされる。彼は封建社会—宮廷貴族社会—国家社会へという西欧の社会編成様式の変遷に感情統御の高度化を確認する\*。理由については社会的分業や社会分化の高度化或いは国家形成という社会構造的変数を挙げる。つまり社会構造の変化に基づく行為者間の相互依存性の増大が個々の行為の調整を必要としその部分として感情統御が進展したという話である。また彼によれば現代の福祉社会にも同様の傾向が見られるという。総括すれば感情文化の禁止的様態への変容が緩慢かつ長期的な波動において進行中であるというのが彼の議論である。

現代的感情文化はどの連続線上にどの不連続線上にあるのか。②Weber



的問題系は合理化である。その過程のなかに感情を置く。感情の合理化とは感情の排除・抑圧・禁止であるより、より一般的抽象的には感情の計算可能性への形式化である\*\*。どの状況でどの感情がどの程度に生起し表出されるかが計算可能、予期可能になるということである。⑥Elias 的問題系は禁止的感情文化の生成・拡張である。但し拘束的暴力的な禁止の外在的強要でなく感情の自己統御に彼の主眼はある。合理化と自己統御という問題系は現象的には煽動/禁止の対立項を含む場合もあるが、抽象度を深化すれば共に主題化的（広義の煽動）である。そこで感情への価値付与・煽動をも効果する感情合理化と感情の自覚的反省的な自己統御をその内容とする感情の主題化作業に注視し、その質的量的浸透傾向をモダンな感情文化と現在のそれとの連続線として取敢えず仮設する\*\*\*。一方不連続線を次の様に理解する。近代社会における感情の主題化は単に感情の意識的な対象化操作化であるに留まらず、個別化された諸個体に私密的な内面を懐胎させつつ、そこに着床する内自的エージェントに感情を結びつけそれを問題化する。問題化の最終審はいわゆる主体=自己である。近代社会のこの標準的事態が主体の過剰な自己主題化によって内破し主体それ自体の実定性がゆらぐ\*\*\*\*。近代の現実構成が主体と世界の相補的な実定性をその根拠の源泉としていたなら、主体のゆらぎは世界のゆらぎとなり、両項の相関項である感情や感情操作は現実的台座を喪失することになる。そこに現成する浮遊する感情はシミュレーションという位格をもつだろう。これが感情文化のモダン/ポスト・モダンの不連続線である [内田, 1987., Baudrillard, 1984].

\* Vowinckel [1989] は西欧文明化における感情統御のモードを「宮廷の心情」「政治の頭」「美しき魂」に分類する。

\*\* 官僚制の特性つまり「愛や憎しみおよび一切の純個人的な感情的要素、一般に計算不可能なあらゆる非合理的な感情的要素を職務の処理から排除するということ」 [1973: 269] を言う Weber が、ある領域での合理化にとって計算不能

な感情の禁止は要件であると主張していることは周知である。注意すべきは社会全域的な合理化と社会全域的な感情禁止を直結することである。

\*\*\* Gerhards [1988: 235-275] は煽動（情報化, 言語化）を（モダンな）感情統御に対するポストモダンな特性として付加し, 両者によって現代的感情文化を理解する。だが母性愛に関する議論（或いは儀礼やカリスマ）が語るように感情煽動それ自体は必ずしも特殊ポストモダンではない。

\*\*\*\* この事態は社会現象のみならずその反省的思考・理論の変更を誘導した。主体=自己を理論的起点としない思考群へ S. I. を送付する或は回収する試行が実施中である。失敗すれば現行の感情社会学による現状把握は困難となる。

### 3.2. 感情の市場化

感情合理化により計算可能性を付され物象化的取り扱いの対象となる。或いは対自化され反省的自覚的な統御の対象となる。現代的感情文化がこれらを保存・称揚することで安定的に成立するシステムのひとつが感情市場である。主題化による感情への価値付与と感情の自律及び内自化を先行条件にして, 実質的な交換財として感情が自覚的統御的に生産・流通・消費される事態である。大別して市場交換の財が, 1) 感情, 2) 感情操作（統御）の技法, という二つの場合がある。前者では消費者に供給される商品は感情経験（非効用的な感情の除去を含む）で, 感情操作の技法はノウハウとして秘匿される\*。後者は感情操作技法をマニュアル化しコピーライトを明記した上で商品として流通させる。現象として, 感情操作技法を企業化し情緒産業部門\*\*へ参入する生産者, 或いは感情労働を主たる業務とする労働者の増加傾向が想定される。

\* 商品としての感情を消費行為一般に付随する感情・快楽経験一般と混同してはならない。或いは「感性消費」「感性マーケティング」の対象範囲とも第一義的には異なる。商品の使用価値（効用・機能）以外の付加価値が実質的交換価値として流通する場合, 消費者の感情経験という標的が商品企画に内在し, またそれが消費目的・誘因として大きく作用することがある。「市場の感情化」と呼べるこの現象は感情主題化の多様な線分の交差上に結像するが感情シミュレーションの問題系にその中心性はある [岡原, 1990]。感情の市場化とシミュレーション

ン化はある理論準位において断絶するが現象的には相乗的に錯綜する。

\*\* 中村雅哉 (ナムコ社長) は知識・情報産業に次ぐ第五次産業として「情報産業」を考える (資料提供は山田昌弘氏)。

### 3.3. 感情シミュレーション

現実的台座を欠き照合系から解除された感情は多次元的な方向への増殖を示すだろう。感情への過剰な配慮それ自体でありその結果である。感情の記号的増殖は真理の言説に回収されない意味作用の方向性を喪失した「感情」を産出する。感情規則や感情語が自己準拠的モードの中で無根拠に変換され変態し、現実との相関には無関心に感情が語られることになる。全域的ではないが現代社会のいくつかの部分で顕著である。電腦メディアによる遊戯が与える感情や消費社会が誘導する感情はオリジナルでもコピーでもない。主体＝自己の検閲に依拠せず感情操作の形式を確保するシステムが作動開始中である。例えば自己実現や人間性回復を標榜する「商業心理セラピー」\* ではある特定感情をクライアントが経験するよう状況設定し、現出した感情への対処方法を操作的に問題化する。そこで作り上げられた感情は日常世界の感情のコピーとして登場するが実は日常世界の感情をそのコピーとして形成するモデルでもある。そこに現実に準拠した感情はない。肥大・増幅した言説化は「恋に恋する、恐怖を怖れる」自己反省的な感情 [Dreitzel, 1981] をも作成する。これらは実在に準拠しない感情シミュレーションである。

\* 感情操作技法を商品化する、いわば感情市場化の代表であるが、その商品は感受性訓練、ゲシュタルト療法、バイオフィードバック、フォーカシング、論理療法、アサーションなどを組み合わせた体験の場である。これらの心理セミナーは感情を自己との関連で主題化する、一見それは脆弱な自我の再編を目的とした内自的エージェントの構築、つまり主体化実践への感情の組込みのように思われる。その限りでモダンな感情文化の範囲内にある実践と評価されるかもしれない。だがセミナーで実現・実感される自己は継続的な主体であるより、多様な演出と技法が結像するその場の形象である。照合系としては作動しない。結局は感

情も自己も相互反転的に指示しあう循環にあり、実定的な項・根拠と成りえない。「感情」を感情に「自己」を自己にする断片的な営みが演戯されるだけである。そこでは消費のモードが実施され、要／不要の基準が曖昧化し「感情」の過度の不必要な消費がなされている。

#### 4. おわりに

現代的感情文化を分析する包括的枠組と概念装置の提出に終始し、なすべき多くが先送りになった。現代的感情文化に関する、現象の記述やメルクマールの規定そしてその実証的資料の収集。その方向への感情文化の変容を起動した諸実践——「精神医学」「幼児・児童教育」「メディア情報」「サービス業」など——とその効果の軌跡をトレースすること。枢要な課題である。ひとつ最後に付言しよう。感情社会学という営みが感情へ過剰に配慮する自己反省的な感情文化の一部であること、そしてその言説的实践であることは疑いを知らない。

#### 参 考 文 献

- Ariès, Ph. 1980. 『<子供>の誕生』杉山光信・杉山恵美子訳 みすず書房。  
 安積純子・岡原正幸・尾中文哉・立岩真也 1990. 『生の技法——家と施設を出て暮らす障害者の社会学』藤原書店。  
 Badinter, E. 1981. 『プラス・ラブ——母性本能という神話の終焉』鈴木晶訳 サンリオ出版。  
 Baudrillard, J. 1984. 『シミュラクルとシミュレーション』竹原あき子訳 法大出版局。  
 Benedict, R. 1973. 『文化の型』米山俊直訳 社会思想社。  
 Blumer, H. 1969. *Symbolic Interactionism: Perspective and Method*. Prentice-Hall.  
 Collins, R. 1984. "The Role of emotion in Social Structure." in: Scherer/Ekman (ed). 1984: 385-396.  
 Denzin, N. 1983. "A note on emotionality, self, and interaction." *A. J. S.* 89: 402-409.  
 Dreitzel H. P. 1981. "The Socialization of Nature: Western Attitudes towards

- Body and Emotions.” in: Heelas/Lock (ed). 1981. *Indigenous Psychologies*. Academic Press: 205-223.
- Duden, B. 1986. 「資本主義と家事労働の起源」『家事労働と資本主義』丸山真人編訳 岩波書店: 1-47.
- Elias, N. 1977/78. 『文明化の過程』上・下 中村元保・吉田正勝他訳 法政大学出版会.
- Febvre, L. 1977. “Sensibilität und Geschichte: Zugänge zum Gefühlsleben früherer Epochen.” in: Honegger, C. (hg) 1977. M. Bloch, F. Braudel, L. Febvre u.a. *Schrift und Materie der Geschichte*. Frankfurt am M.: 313-334.
- Foucault, M. 1984. 『ミシェル・フーコー 1926-1984』福井・桑田・山本編 新評論.
- Foucault, M. 1984a. 「主体と権力」渥海訳『思想』718: 235-249.
- Foucault, M. 1986. 『性の歴史 I 知への意志』渡辺守章訳 新潮社.
- Franks, D./McCarthy, E. D. (ed) 1989. *The Sociology of Emotions: Original Essays and Research Papers*. Greenwich/London.
- Gerhards, J. 1986. “Soziologie der Emotionen.” *KZfSS* 38: 760-771.
- Gerhards, J. 1988. *Soziologie der Emotionen: Fragestellungen, Systematik und Perspektiven*. Weinheim/München.
- Gerhards, J. 1988a. “Emotionsarbeit: Zur Kommerzialisierung von Gefühlen” *Soziale Welt* 1: 47-65.
- Gordon, S. L. 1981. “The Sociology of Sentiments and Emotion.” in: Rosenberg, M./Turner, R. (ed) 1981. *Social Psychology*. New York: 562-592.
- Gordon, S. L. 1985. “Micro-sociological theories of emotion.” in: Helle (ed) 1985. *Micro Sociological Theory*. Sage: 133-147.
- Gordon, S. L. 1989. “Institutional and Impulsive Orientations in Selectively Appropriating Emotions to Self.” in: Franks/McCarthy (ed) 1989: 115-135.
- Harre, R. (ed) 1986. *The Social Construction of Emotions*. New York.
- 廣松渉 1986. 「表情現相論序説」『現代思想』14-2: 202-230.
- Hochschild, A. R. 1979. “Emotion Work, Feeling Rules and Social Structure.” *A. J. S.* 85: 551-575.
- Hochschild, A. R. 1983. *The Managed Heart: Commercialization of Human Feeling*. Berkeley.

- Honegger, C. 1983. "Überlegungen zur Medikalisierung des weiblichen Körpers." in: Imhof (hg) 1983: 203-213.
- Imhof, A. E. (hg) 1983. Leib und Leben in der Geschichte der Neuzeit. Berlin.
- Kemper, Th. D. 1978. "Toward a Sociology of Emotions." *Ame. Sociologist* 13: 30-41.
- Kemper, Th. D. 1980. "Sociology, Physiology, and Emotions: Comment on Shott." *A. J. S.* 85: 1418-1423.
- Kemper, Th. D. 1981. "Social Constructionist and Positivist Approaches to the Sociology of Emotions." *A. J. S.* 87: 336-362.
- Kemper, Th. D. 1984. "Power, Status, and Emotions: A Sociological Contribution to a Psychophysiological Domain." in: Scherer/Ekman (ed) 1984: 369-383.
- Lepenes, W. 1985. "Cold reason and culture of the feelings." *Social Science Information* 24-1: 3-21.
- Lutz, C. A. 1988. *Unnatural Emotions*. Chicago.
- Medick, H./Sabeau, D. (hg) 1984. *Emotionen und materielle Interessen: Sozialanthropologische und historische Beiträge zur Familienforschung*. Göttingen.
- Mog, P. 1976. *Ratio und Gefühlskultur: Studien zu Psychogenese und Literatur im 18. Jahrhundert*. Tübingen.
- 岡田あおい 1990. 「アナール学派の家族史研究——J.-L. フランドラン, M. セガレーヌの業績を中心として」『三田学会雑誌』83-1: 156-175.
- 岡原正幸 1987. 「感情と社会——感じることの社会性」『日常生活と社会理論』山岸健編著 慶應通信: 153-174.
- 岡原正幸 1987a. 「感情経験の社会的理解」『社会学評論』151: 17-31.
- 岡原正幸 1987b. 「『愛情』の社会的構成——感情社会学の確立に向けて」第60回日本社会学会大会 (日本大学) 報告レジュメ (未発表).
- 岡原正幸 1990. 「商品情報誌とカタログ販売」『青年心理』79: 104-107.
- Okahara, M. 1990. "A Situation has a Feeling: On Western/Japanese Understanding of Emotion". Unpublished paper presented at the 12th ISISSS (U. of Toronto).
- 岡原正幸・木田邦治 1988. 「現代社会と感情——序説」『年報社会学論集』関東社会学会 創刊号: 35-46.
- Perrot, M. 1988. 「私的領域と権力」福井憲彦訳『思想』765: 25-39.

- Perrot, M. 1989. 『フランス現代史のなかの女たち』福井・金子訳 日本エディタースクール出版部.
- Pollock, L. A. 1988. 『忘れられた子どもたち』中地克子訳 勁草書房.
- Schachter, S./Singer, J. E. 1962. "Cognitive, social and physiological determinants of emotional state." *Psychological Review* 69: 379-399.
- Scheff, Th. J. 1979. *Catharsis in Healing, Ritual, and Drama*. Berkeley.
- Scheff, Th. J. 1988. "Shame and conformity: The deference-emotion system." *A. S. R.* 53: 395-406 (in: Scheff. 1990. *Microsociology*. Chicago. 71-95).
- Scherer, K. R. 1982. "Emotion as a process: Function, origin and regulation." *Social Science Information* 21: 555-570.
- Scherer, K. R./Ekman, P. (ed) 1984. *Approaches to Emotion*. New York.
- Schulte, R. 1984. "Kindsmörderinnen auf dem Lande." in: Medick/Sabean (hg) 1984: 113-142.
- Shorter, E. 1987. 『近代家族の形成』田中・岩橋・見崎・作道訳 昭和堂.
- Shott, S. 1979. "Emotion and Social Life: A symbolic interactionist analysis." *A. J. S.* 84: 1317-1334.
- Shott, S. 1980. "Reply to Kemper." *A. J. S.* 85: 1423-1426.
- Sonntag, M. 1988. "Historische Psychologie gegen den psychologischen Anachronismus: Lucien Febvre." in: Jüttemann, G. (hg) 1988. *Wegbereiter einer historischen Psychologie*. München. 179-190.
- Stearns, P. N./Stearns, C. Z. 1985. "Emotionology: Clarifying the history of emotions and emotional standards." *Am. Hist. Rev.* 90: 813-830.
- Thoits, P. A. 1989. "The Sociology of Emotions." *Annu. Rev. Sociol.* 15: 317-342.
- 内田隆三 1987. 『消費社会と権力』岩波書店.
- Vowinckel, G. 1989. "Zivilisationsformen der Affekte und ihres körperlichen Ausdrucks." *Zeitschrift für Soziologie*. 18: 362-377.
- Weber, M. 1962. 『支配の社会学Ⅱ』世良晃志郎訳 創文社.
- Weber, M. 1972. 『宗教社会学論選』大塚・生松訳 みすず書房.
- Weber, M. 1973. 「支配の社会学」世良訳『政治・社会論集』河出書房新社: 237-301.
- 山田昌弘 1986. 「情緒社会学序説」『東京学芸大学紀要』38: 21-30.
- 山田昌弘 1987. 「近代家族形成における情緒の二つの意味」『現代社会学』24: 110-32.